

※あくまでも情報誌idea 5月号「センターの自由研究」のために整理した情報です。内容には推測的事項も含まれますので、ご理解をお願いいたします。

西暦	時代	年号		
701	飛鳥	大宝	大宝律令により、国・郡・里などの単位が定められた(国郡里制) → 陸奥の国磐井郡吾勝郷吾妻ノ荘 ※鬼死骸村は吾勝郷桜野荘	
711		和銅 4年	秦氏族(京都)が稲荷山三ヶ峰の平らな処に 稲荷神 を奉鎮、伊奈利社(現・伏見稲荷大社)建立	
794			都が平安京に遷ったことで秦氏が政治的な力を持つ → 稲荷神が広く信仰される ように	
801	奈良	延暦 15年頃	坂上田村麻呂が蝦夷征伐で胆沢遠征 → この頃から 田村麻呂が勧請した(とされる)寺社仏閣が複数出現 ※田村麻呂は「毘沙門天の化身」と評されたため、毘沙門天を安置する 天台宗系の寺院 が多く建立された？	
806			延暦	空海帰国 → 東寺を活動拠点に真言密教を広める → 真言密教の普及とともに稲荷信仰も全国へ ※真言密教では「荼枳尼天(だきにてん)」に稲荷神を習合させたため ※「荼枳尼天」が人の心臓を食らう夜叉神のため、平安後期からその本体が狐の霊であるとされるようになった。 狐の「崇り神」としての側面 はそういうところから来ている？ 伝教大師最澄によって 天台宗開宗
842	平安	承知 9年	宮城県・竹駒神社勧請(稲荷神) ※稲荷神社の勧請としては最も古いとされるものの1つ	
850		嘉祥	比叡山延暦寺の高僧慈覚大師円仁によって 中尊寺(天台宗) が開かれる	
942		天慶 5年	稲荷神の位階(神階)が最高の「正一位」に → さらに人気高まる	
1057		天喜 5年	岩手県・志和稲荷神社勧請(稲荷神) ※稲荷神社の勧請としては最も古いとされるものの1つ	
1105		長治 2年	清衡公が中尊寺の造立に着手 ※中尊寺経蔵別当の私領だった 骨寺が中尊寺の荘園 になる(経蔵の維持費用を賄うため)	
1157		保元 2年	父・基衡の死去を受け、 秀衡が家督を相続 狐が平泉で化けて悪さを繰り返す → 秀衡の命で射落とす → 狐の首が狐禅寺青竹地内(大名婦(明舞)屋敷)へ 狐のたたりがひどいため、 秀衡が稲荷大明神のお宮と長床を建立 別当寺として「白馬山狐禅寺」(天台宗) も置いた 大明舞屋敷内で舞を奉納していた(秀衡も鑑賞)	
1187			文治 3年	秀衡没(病死)
1189			5年	奥州藤原氏滅亡
1260			鎌倉	奥羽天台宗寺院廃滅令
1337		南北朝	建武 4年	中尊寺火災 多くの堂塔、宝物を焼失(衰退していた最中)
1439	室町	永享 10年	鶏頭山光西寺に改宗	
1441		嘉吉 2年	修験院「来善院」開院	
1591	安土桃山	天正 19年	狐禅寺城主の新柵種次(別名:太郎左衛門)没 ※狐禅寺城は鶴ヶ館とも呼ばれている	
1600年頃	安土桃山～江戸 江戸		光西寺で火災 昔からの記録やご本尊消失	
1695		元禄 8年	肝入ほか村民11人が連名で稲荷大明神の言い伝える由来を詳しく述べ、大肝入二関市左衛門に手紙を差し出した→ 現在の通説の発祥 稲荷大明神は旧跡と伝えられていたが、当時の宮守・孫右衛門(大名婦(明舞)屋敷)が小さなお宮を建て、お祭りを行っていた	
1696		9年	宮守・孫右衛門が建てたお宮を一関藩役所が改築に取りかかる → 完成 → 神霊を遷す このころから別当は「来善院」がつとめていたといわれている	
1821		文政 4年	稲荷大明神の宮守・佐藤孫右衛門が当社に関する話を記録「 磐井郡西磐井狐禅寺村大名婦稲荷大明神記録書上並御宮御建替旧記留 」 「旧記留」には元禄8年の手紙を差し出した記録などが記されている。	
1872		明治 5年	神仏分離令公布 → 稲荷大明神は青竹神社へ 来善院は廃止され、法印が神主となる	
1874		7年	村社 稲荷神社が狐禅寺村の中心にできる(現 狐禅寺市民センター横)	
1889		22年	狐禅寺村が真滝村に編入	
1898		31年	青竹神社火災	
1925		大正 14年	村民有志の援助と氏子らの協力を得て、青竹神社社殿復旧	
1981		昭和 56年	青竹神社は遊水地事業により現在の場所へ遷される (現 岩手県一関市狐禅寺舞台120番地)	
2005		平成 17年	青竹神社修造	